

## 怒りから祈りへ

文 中野 東禪

「南川目の岩屋さ寝泊りしてらった（していた）ころハ、月のいい晩なんか高下駄つつか  
げで、笛っこ鳴らしながら長沢茶屋の方まで下ってきてよオ。とにかく笛っこハ、上手な  
人だったなヤ」

老人は鞭牛さまのことを、そんなふうに語りつたえた。

その鞭牛さまの笛の音色には、どんな心がこもっていたであろうか。

鞭牛さまの祈りは、ますますふくらんでゆくのである。

餓えのくるしみ、けだるさの中で、生への想いだけを夢うつつの中でのこして息絶えて  
ゆく男や女、老人、子供…と、どれほど多くの人の死を見ただろうか。

何ともなき命とてもや便りけり今や何をかたよりやせん

昨日まで語りあった人々である。橋野村の林宗寺の得水や壇中の人たちは、どうしてい  
るであろうか。ふるさとの和井内村の人たち、生家の兄や甥や姪たちはどうしているであ  
ろうか。鞭牛さま自身、次の春まで生きていられるかどうかわからない。

そんな中でも、ふるさとの便りはとどくものである。あの人死んだ、こちらの爺さま  
がのたれ死にしたと人伝つたてに聞くのであった。

白いとは風色なれば便りあり本来空の便り聞くかな

鞭牛さまの祈りは、人々の苦をかわって受ける、などという間接的なものではなくなっ  
ていた。加えてそれは鞭牛さま自身のさけびであり、怒りとなっていた。その怒りのよう  
な心情は、二つの異質なものが錯綜さくそうしたまま肉体の深部をうずまいて、自分自身をどうし  
ようもない行動へとかりたてているのがよくわかるのである。

一つは、こんな無益な死を死んでゆくことへの怒りであり、もう一つの無為無策のおの  
れとお上への怒りである。口にすることははばかれるが、大槌の代官所は何をしている  
のであろうか。盛岡のご城下へ行けば、お救い小屋があるかもしれない。いや、お救い小

屋はないそうだ”といううわさもある。だがたとえあったとしても、この辺鄙へんびの地からどうしてゆけようか。

王法は仏法ともに離れて国土みだれて民のくるしみ

そう詠よむのである。そう想うとき、鞭牛さまの脳裏に、種市のあのひらけた平野がうかぶのであった。どこまでもつづく道、牛や馬に荷をつけてどこへでもゆける道、その道がなにかしら、不思議ななつかしきでよみがえってくるのであった。

そうした怒りと、涙と、そしてむなしさと、混沌こんとんとした感情とが、さげばずにはいられない内心の声となつて、三十一文字の表白になつてくるのである。詠まずにいられないし、そうすることによって自分を見、錯綜したおのれをのり超えたかったのである。たしかな道を見つけたかったのである。

鞭牛さまの和歌は、修行時代に学んだものであろうか、百首歌の修練であった。

東西南北、春夏秋冬、空風火水地、南無阿弥陀仏などの各一文字を題に定め、二十首ずつ詠む、平安期以来の詠みかたであった。

念仏をとなえ、人々に念仏を申させて歩くうちに、御和讃や御詠歌も唱えていた。またいつしか、自作の和歌も教えたりしていた。

このどうしようもない現実と、おのれのふつきれなさの中で、外へ向かうだけでなく、和歌となつて内面へと沈潜してゆくのである。

こうして、岩屋で迎えた宝暦六年の正月十五日、鞭牛さまの“妄想歌”千首が完成したのであった。それを書きあげてみて、体内には、何かしらふんぎりのつくおもいが感じられはじめていた。

悶々もんもんとする鞭牛さまの怒りのような気持ちは、もう一つの別のかたちをもっていた。罪なくして、なぜかくも苦しまねばならないのか、子を残して死に切れぬ想いのまま朽くちてゆく親たちは、はたして成仏できるのか、という問いであった。

鞭牛さまが、この川目の岩屋になじみ住みついたのは、ここには十三仏といわれる、雄大な奇岩が重なった霊場があったからである。それは、険しい山道を一キロほど登ったところに、とつぜん高さ五、六メートルもあるうかという岩のかたまりがいくつか重なりあい、ささえあっている不思議なところであった。

鞭牛さまは宝暦五年の秋から、この十三仏の霊場を復興しようと試みはじめた。そして多くの協力者を得て、石を寄進してもらっていた。

天空につき出た巨岩の上の平らに、行儀よくけずった四角を石に“今上皇帝聖壽萬安”  
としるし、谷をへだてた正面の山の頂きと大空とを背にしたかたちで建てた。そして、巨  
岩の上や間に阿弥陀如来、薬師如来、虚空藏菩薩など、初七日から四十九日、百カ日、そ  
して三十三年忌にいたる十三の忌日の本地仏の名を刻んだ自然石を配した。ところどころ  
に大日山とか文殊山などの山号も五つほどおいた。そして四天王の名号石もおき、田野浜  
源衛門、橋野村助三郎、山田野鈴木善次郎など、施主の名を刻んだ石も建てた。そして巨  
岩の上に小さな堂を、北川目の大工源四郎が建てて納めた。

十三仏の霊場に登る道は、鞭牛さまと協力者数人によって木を伐り、石を組み、ある  
ところは蛇行し、あるところは直線の石段で造られた。村人たちは鞭牛さまの土木工事の  
手腕に目をみはり、やがて口伝てにうわさになっていった。

(つづく)